

「常用漢字表（平成 22 年 11 月 30 日内閣告示）」について

木戸 久二子

1. はじめに

本稿では、平成 22(2010)年 6 月 7 日に「改定常用漢字表」として文化審議会答申が出され、同年 11 月 30 日に内閣告示された、新「常用漢字表」について、その概略を述べたいと思う。筆者は平成 21・22 年、文化庁が主催する国語研究問題協議会に出席し、「改定常用漢字表等」についての説明を聞く機会を得た⁽¹⁾。国語に関わる方以外にはどうしても馴染みの薄い話だと思うが、普段身近に使用している漢字の中にも、今回の変更が関係している物が少なくない。新・常用漢字表の一端でも知っていただければ幸いである。

2. 戦後の国語施策—漢字表について

まずは、第二次世界大戦後の国語施策における漢字表について見ていく。

昭和 21 (1946) 年 11 月 16 日

当用漢字表 (1,850 字) 内閣告示

昭和 56 (1981) 年 10 月 1 日

常用漢字表 (1,945 字) 内閣告示

平成 22 (2010) 年 6 月 7 日

改定常用漢字表 答申

平成 22 (2010) 年 11 月 30 日

常用漢字表 (2,136 字) 内閣告示

平成 22 年 11 月の内閣告示は、以下のよう
なものである。

内閣告示第二号

一般の社会生活において現代の国語を書き表すための漢字使用の目安を、次の表のように定める。

なお、昭和五十六内閣告示第一号は、廃止する。

平成二十二年十一月三十日

内閣総理大臣 菅 直人

(原文は縦書き)

当用漢字表が常用漢字表に改定されるまで 35 年、今回は、昭和 56 年告示の旧・常用漢字表以来 29 年ぶりの改定となったわけである。「昭和五十六内閣告示第一号は、廃止する。」と記されているように、旧・常用漢字表を廃止しての新・常用漢字表のため、名称は「常用漢字表」をそのまま使用することになった。

常用漢字表の改定にあたっては、平成 17 年 3 月 30 日の文部科学大臣諮問が一つの契機となっている。

○情報化時代に対応する漢字政策の在り方について

種々の社会変化の中でも、情報化の進展に伴う、パソコンや携帯電話などの情報機器の普及は人々の言語生活ととりわけ、その漢字使用に大きな影響を与えている。このような状況にあって「法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安」である常用漢字表（昭和 56 年内閣告示・訓令）が、果たして、情報化の進展する現在においても「漢字使用の目安」として十分機能しているのかどうか、検討する時期に来ている。

諮問では特に、「これまで国語施策として明確な方針を示してこなかった固有名詞の扱いについても、基本的な考え方を整理していくことが不可欠となる。」及び「検討に際しては、漢字の習得及び運用面とのかかわり、手書き自体が大切な文化であるという二つの面から整理していくことが望まれる。」と述べられている。

3. 漢字の削除と追加について

新・常用漢字表は、旧・常用漢字表の 1,945 字から「勺（シャク）、錘（スイ・つむ）、銚（セン）、脹（チョウ）、匁（もんめ）」の 5 字を削

除し、資料1の196字を追加した。よって、新・常用漢字表は合計2,136字となったわけである。旧・常用漢字表の1,945字という数字は、第二次世界大戦の終了した年の西暦であり、覚えやすかったと思われる。ところが、新・常用漢字表の2,136字という数字はどうであろうか。私自身、当初あまり記憶に残らなかった。そこで、「 $2 + 1 + 3 = 6$ 」という足し算の計算式を連想して覚えることにした。

新・常用漢字表に新たに加えられる漢字の選定にあたっては、旧・常用漢字表と「現在の社会生活における漢字使用の実態との間」の「ずれ」を解消するという観点から字種の選定をおこなうこととした、と述べられている。基本的には、一般社会でよく使われている漢字（＝出現頻度数の高い漢字）を選定することを目指すのであるが、まず、「漢字出現頻度数調査」を実施し、その中の「書籍860冊分の凸版組版データ」＝Aを基本資料と位置付けた。そして、旧・常用漢字としては最も出現順位の低かった「銑」（4004位）と同じ出現回数を持つ漢字まで、合計4011字の1字1字について、改定常用漢字表に入れるべきかどうかを判断したのである。

追加するのか削除するのか、判断の観点は、次のように説明される。

＜入れると判断した場合の観点＞

- ①出現頻度が高く、造語力（熟語の構成能力）も高い
 - 音と訓の両方で使われるものを優先する
- ②漢字仮名交じり文の「読み取りの効率性」を高める
 - 出現頻度が高い字を基本とするが、それほど高くなくても漢字で表記した方が分かりやすい字
 - 出現頻度が高く、広く使われている代名詞
- ③固有名詞の例外として入れる
 - 都道府県名及びそれに準じる字
- ④社会生活上よく使われ、必要と認められる
 - 書籍や新聞の出現頻度が低くても、必要な字

＜入れないと判断した場合の観点＞

- ①出現頻度が高くても造語力（熟語の構成能力）が低く、訓のみ、あるいは訓中心に使用
- ②出現頻度が高くても、固有名詞（人名・地名）中心に使用
- ③造語力が低く、仮名書き・ルビ使用で、対応できると判断
- ④造語力が低く、音訳語・歴史用語など特定分野で使用

このうち、固有名詞に関する観点が旧・常用漢字表とは大きく異なる点であり、新たに都道府県名及びそれに準じる字が追加されることとなった。具体的には、都道府県名に使われる漢字として「茨、媛、岡、熊、埼、鹿、栃、奈、梨、阪、阜」の11字、それに準じる字として「畿、韓」が加えられた。これらの漢字が旧・常用漢字に入っていなかったことに驚かれる方も多いのではなかろうか。これは、旧・常用漢字表が「固有名詞を省く」という原則によっていたからであり、旧・常用漢字表が「現在の文字生活の実態から既に乖離している」ことの代表例の一つであった。今回、都道府県名及びそれに準じる字が追加された意義は大きいと思われる。その一方、これら都道府県名の漢字より出現頻度が高い「之、伊」は、都道府県名でない固有名詞、つまり人名・市町村名等に使用されるということで選ばれなかった。

なお、佐藤・藤原・藤井・加藤・伊藤…と多くの場合、姓として使用されている「藤」は、今回追加された漢字の一つである。人名は外す原則の例外扱いになった理由として、「葛藤」という熟語での使用例が重視されたことが特に説明された。

4. 音訓の追加について

新・常用漢字表を語る場合、漢字数の増減にどうしても注目が集まりがちであるが、実は新しい音訓が示された例がかなり存在する。資料2に示そう。

特に取り上げておきたい例は、

＜音訓の追加＞

9「私（訓：わたし）」

20「他（訓：ほか）」

22「描く（訓：かく）」

＜語例欄・備考欄の変更＞

8「十（＝備考欄に注記）：音「ジッ」の備考欄に＜「ジュッ」とも。＞と注記。」

の 4 例である。

今までは、常用漢字表上「私」には「わたくし」の訓しかなく、「描く」は「えがく」としか読めなかった。また、「そのほか」の「ほか」を漢字にするには、「その外」と書かざるを得なかった。小学 1 年生の国語の教科書では、「十

ぴき」の「十」に「ジッ」と読みをふっていたが、「ジュッ」が並記されるようになった。

文字生活の実態により変更が加えられた事例である。

注

(1) 平成 21 年度東日本地区国語問題研究協議会（愛知大会）、8 月 19・20 日、ウィルあいち。平成 22 年度西日本地区国語問題研究協議会（大分大会）8 月 19・20 日、別府国際コンベンションセンター。

資料 1

挨	曖	宛	嵐	畏	萎	椅	彙	茨	咽	淫	唄	鬱
怨	媛	艷	旺	岡	臆	俺	苛	牙	瓦	楷	潰	諧
崖	蓋	骸	柿	顎	葛	釜	鎌	韓	玩	伎	亀	毀
畿	臼	嗅	巾	僅	錦	惧	串	窟	熊	詣	憬	稽
隙	桁	拳	鍵	舷	股	虎	錮	勾	梗	喉	乞	傲
駒	頃	痕	沙	挫	采	塞	埼	柵	刹	拶	斬	恣
摯	餌	鹿	叱	嫉	腫	呪	袖	羞	蹴	懂	拭	尻
芯	腎	須	裾	淒	醒	脊	戚	煎	羨	腺	詮	箋
膳	狙	遯	曾	爽	瘦	踪	捉	遜	汰	唾	堆	戴
誰	旦	綻	緻	耐	貼	嘲	撈	椎	爪	鶴	諦	溺
填	妬	賭	藤	瞳	枳	頓	貪	井	那	奈	梨	謎
鍋	匂	虹	捻	罵	剝	箸	汜	汎	阪	斑	眉	膝
肘	阜	訃	蔽	餅	壁	蔑	哺	蜂	貌	頰	睦	勃
昧	枕	蜜	冥	麵	冶	弥	闇	喻	湧	妖	瘍	沃
拉	辣	藍	璃	慄	侶	瞭	瑠	呂	賂	弄	籠	麓
脇												

資料2

＜音訓の変更＞

- 1 側 (訓：かわ) → 「がわ」と変更。

＜音訓の追加＞

- | | |
|---------------|---------------------|
| 1 委 (訓：ゆだねる) | 15 逝 (訓：いく) |
| 2 育 (訓：はぐくむ) | 16 拙 (訓：つたない) |
| 3 応 (訓：こたえる) | 17 全 (訓：すべて) |
| 4 滑 (音：コツ) | 18 創 (訓：つくる) |
| 5 関 (訓：かかわる) | 19 速 (訓：はやまる) |
| 6 館 (訓：やかた) | 20 他 (訓：ほか) |
| 7 鑑 (訓：かんがみる) | 21 中 (音：ジュウ) 【1字下げ】 |
| 8 混 (訓：こむ) | 22 描 (訓：かく) |
| 9 私 (訓：わたし) | 23 放 (訓：ほうる) |
| 10 臭 (訓：におう) | 24 務 (訓：つとまる) |
| 11 旬 (音：シュン) | 25 癒 (訓：いえる・いやす) |
| 12 伸 (訓：のべる) | 26 要 (訓：かなめ) |
| 13 振 (訓：ふれる) | 27 絡 (訓：からめる) |
| 14 粋 (訓：いき) | 28 類 (訓：たぐい) |

＜音訓の削除＞

- 1 畝 (訓：せ)
2 疲 (訓：つからす)
3 浦 (音：ホ)

＜語例欄・備考欄の変更＞

- 1 愛 (=都道府県名)：＜愛媛(えひめ)県＞と注記。
2 音 (=語例の変更)：音「イン」の語例にある「音信不通」を「母音」に変更し、備考欄の「音信不通」についての注記を削除。
3 堪 (=語例の追加)：音「カン」の語例として「堪能」を追加し、その備考欄に＜「堪能」は、「タンノウ」とも。＞と注記。
4 岐 (=都道府県名)：＜岐阜(ぎふ)県＞と注記。
5 屈 (=語例の追加)：語例「理屈」を追加。
6 児 (=都道府県名)：＜鹿児島(かごしま)県＞と注記。
7 滋 (=都道府県名)：＜滋賀(しが)県＞と注記。
8 十 (=備考欄に注記)：音「ジッ」の備考欄に＜「ジュッ」とも。＞と注記。
9 従 (=語例欄の変更)：訓「したがう」の語例「従って〔接〕」を削除。
10 昭 (=語例の追加)：語例「昭和」を追加。
11 城 (=都道府県名)：＜茨城(いばらき)県、宮城(みやぎ)県＞と注記。
12 神 (=都道府県名)：＜神奈川(かながわ)県＞と注記。
13 側 (=音訓の変更)：訓「かわ」を「がわ」と変更し、「がわ」の備考欄に＜「かわ」とも。＞と注記。
14 鳥 (=都道府県名)：＜鳥取(とっとり)県＞と注記。
15 透 (=語例欄の変更)：訓「すく」の語例にある「透き間」を削除。
16 破 (=語例の追加)：語例「破棄」を追加。
17 富 (=都道府県名)：＜富山(とやま)県＞と注記。
18 分 (=都道府県名)：＜大分(おおいた)県＞と注記。
19 良 (=都道府県名)：＜奈良(なら)県＞と注記。
20 力 (=字音の動詞化)：音「リキ」を動詞「力む」と使うことも可能であると「表の見方」に明記(「愛⇄愛する」, 「案⇄案じる」などと同様の扱い)。